

松山燻便り

第31号

購読
無料

1日・15日発行・燻に関する情報求ム!
福岡県久留米市田主丸町で活動中!
編集・発行 松山燻復活委員会
幹事・矢野真由美

耳納山の片隅で失われてしまった燻紅葉の景観を復活させることを目的に、燻の素人がまったりとその様子を伝えていく会報です。

ブログ公開中「松山燻復活奮闘日記」 <http://blog.goo.ne.jp/elster/> 連絡先 e-mail : elster@mail.goo.ne.jp
ホームページ「松山燻復活委員会」(燻便りのバックナンバーあり) <http://www.webn-design.com/~mhaze/>



大與のろうそく職人大西氏が荒木製蠟に訪れた。

燻でキャンドル その2

試行錯誤が続く

燻のキャンドル製作

胴回りと芯のバランス

キャンドルの蠟が流れてしまう原因は、普通の和ろうそくに比べて胴回りが太いため、蠟の溶ける量が多すぎて、芯が蠟を吸い残してしまつたためでした。たとえカップに入れて火を灯しても、燻の海になり倒れてしまいます。カップの

底には燻が貯まってまます。荒木製蠟も、この現状に行き詰まっています。

どうやったら、もつと芯が蠟を吸い上げてくれるのか。

職人のアドバイスと芯

なすすべもなく一ヶ月ほど経つたある日、滋賀県から大與和ろうそく職人の大西さんが荒木製蠟に立ち寄りしました。

大西さんは、荒木製蠟のろうそく作りの現場を見るやいなや、次々に具体的な問題を指摘していきました。私の方は、ちょうど芯巻きの正徳さんと出会っていたので、質のいい芯ならば、蠟をよりにたくさん吸い込んでくれるだろうと思ひ、正徳さんを荒木製蠟さんに渡しました。

大西さんによる指導と、正徳さんの二つの大きな力によって、燻の



燻のキャンドル。形はほぼ完成した。

飛躍的な進歩…だが

キャンドルの改良への期待が高まりました。そしてその期待は裏切られなかったのです。

その日以降、荒木製蠟のキャンドル製作の技術は飛躍的に進歩しました。出来上がったキャンドルを見ると、以前とは違って美しい形をしています。胴回りが太くて、ほどよい重量感。現代風なハゼロウキャンドルが生まれました。

期待感とともに、さつそく火を灯してみました。炎もいい感じで明るく燃えています。ところが、またもや燻の海です。

あの正徳さんですら、だから流れてしまう燻。止める手だてはないのか。

その時、私は以前正徳さんの言葉を思い出しました。



左が三重巻き、右が二重巻きによるキャンドル。

「荒木さん。正徳さんが『芯の二重巻き』をしたことがあるって言っていました。」
『芯の二重巻き』とは、文字通り二回イグサを巻くことです。通常の二倍のイグサの量にすることで二倍の蠟を吸い上げることができます。キャンドルの胴回りの太さを考えると、この二重巻きが、蠟だれを防ぐことができるともいけません。
私は至急正徳さんから「二重巻き」の芯を巻いてもらい、再び荒木製蠟へ届けました。そして完成して数日後、いよいよ芯の改良版のキャンドルを灯してみると…。
果たして?

続きは次号にて

※本会報を許可なく複製・転載すること、または部分的にもコピーすることを禁じます。